植民地朝鮮をデッサンする

――彦根高等商業学校収集資料の読み方――

阿 部 安 成 [1)]

はじめに

滋賀大学経済経営研究所（以下、研究所とする）では、日本学術振興会 2002 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費、科目名：データベース、課題番号：148063）の交付をうけて、『旧植民地関係資料画像データベース―朝鮮編―』（CD-ROM 版、2002 年 12 月 13 日）を作製した（収録画像データは、2003 年 4 月より、研究所のホームページ http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/index.htm でもみられる [2)]）。CD-ROM に資料を収録するにあたり、研究所が所蔵する彦根高等商業学校収集資料 [3)] から 31 点の資料を選択した（ただし補助金額のつごうにより抄録となった資料もある）。ここに収録資料の書誌情報を示そう。

１　『朝鮮大図絵』元山毎日新聞社、昭和 4[1929]年 9 月 1 日、1 枚、請求記号なし [4)]（2002 年 8 月 29 日購入）

２　『朝鮮金剛山交通大鳥瞰図』朝鮮総督府鉄道局、昭和 4[1929]年 5 月 20 日、1 枚、1―C―67

　　彦根高等商業学校、４，９，３０、№3099、研究部 [5)]

---

1) 本稿は滋賀大学経済経営研究所調査資料室の 2002 年度における業務の成果として発表するものである。本稿執筆のきっかけとなった『旧植民地関係資料画像データベース―朝鮮編―』（CD-ROM 版）の作製は、阿部の監修のもとで、研究所のスタッフである江竜美子、田端加津子、手塚崇生、寺本江梨子、宮本啓子、村下明子、山口悠の尽力によった。

2) 画像データの公開にあたっては、滋賀大学経済学部谷口伸一ゼミナールの尽力を得た。

3) 研究所では、彦根高等商業学校が収集した資料のうち、かつての日本の植民地や日本の権益がおよんだ地域にかかわる資料の目録を発行している。『滋賀大学経済学部備付満蒙関係資料目録』1982 年 3 月、『滋賀大学経済学部備付支那関係資料目録』1983 年 8 月、『滋賀大学経済学部備付朝鮮関係資料目録』1983 年 12 月、『滋賀大学経済学部備付台湾・南方・樺太関係資料目録』1985 年 3 月、『滋賀大学経済学部備付旧植民地関係資料目録（補遺）』1992 年 7 月。なお旧制高等商業学校が収集した資料という分類は、すでに横浜国立大学経済学部でも採用されている（横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター編『横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター所蔵旧制横浜高等商業学校収集資料目録』横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター、2001 年 3 月、を参照）。

4) 表記は、資料名、著者・編者など、発行者、発行年、数量・形態、頁数、請求記号、の順とし、[　]内の表記は筆者による。またマイクロフィルムで撮影した資料については、その№も付記した。

5) 資料に押印された受領印の情報も転記した。「４，９，３０」は「昭和 4 年 9 月 30 日」のこと。判読不能箇所は□□であらわしたり判読不能と明記したりした。調査課は彦根高等商業学校が開校（1923 年 4 月）した年の 9 月に設置された部→

３　『慶州図絵』朝鮮総督府鉄道局、昭和 4[1929]年 5 月 20 日、1 枚、1－C－68

彦根高等商業学校、４，９，３０、№3102、研究部

４　『朝鮮旅行案内』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]昭和 3[1928]年版、1 枚、1－C－107

滋賀大学、№56410、６０，１２，２６、経済経営研究所

５　『朝鮮旅行案内』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]昭和 4[1929]年版、1 枚、1－C－107

彦根高等商業学校、４，１１，２５、№3365、研究部

６　『朝鮮案内』[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 2[1927]年 3 月、1 枚、1－C－42

彦根高等商業学校、３，４，６、№74、研究部

７　『朝鮮の話』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]不明、1 枚、1－C－107

彦根高等商業学校、４，１１，２５、№3370、研究部

８　『キャンピング』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]不明、1 枚、1－C－107

彦根高等商業学校、４，１１，２５、№3372、研究部

９　『大正十五年版　平壌概観』平壌府平壌商業会議所内　松本源作、平壌商業会議所、大正 15[1926]年 8 月 28 日、1 冊、58 頁、1－C－29

彦根高等商業学校、３，５，４、№61、研究部

１０『商工案内』不明、不明、不明、1 冊、16 頁、1－C－31

なし、ただし「昭和弐年」の押印あり

１１『平壌』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]昭和 4[1929]年 7 月、1 冊、2+41 頁、1－C－71

彦根高等商業学校、４，９，３０、№3098、研究部

１２『平壌』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]昭和 7[1932]年 3 月、1 冊、3+56 頁、1－C－107

滋賀大学、№56412、６０，１２，２６、経済経営研究所

１３『平壌』[南満洲鉄道株式会社京城鉄道局][南満洲鉄道株式会社京城鉄道局]不明、1 冊、24 頁、1－C－107

彦根高等商業学校、□□．５．２７、調査課

局で、それが 1926 年に研究部と改められ、さらに 1930 年にふたたび調査課となる（彦根高等商業学校の沿革については、「資料紹介　滋賀大学経済経営研究所調査資料室報」①『彦根論叢』第 337 号、2002 年 8 月、続号に連載中、を参照）。

滋賀大学、№5641□、６０．１２．２６、経済経営研究所

１４『金剛山』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]昭和 4[1929]年版、1 枚、1－C－107

彦根高等商業学校、４，１１，２５、№3373、研究部

１５『金剛山』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]昭和 7[1932]年版、1 枚、1－C－107

滋賀大学、№56411、６０．１２．２６、経済経営研究所

１６『京城』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]昭和 4[1929]年版、1 冊、54 頁、1－C－69

彦根高等商業学校、４，１０，□□、№3103、研究部

１７『京城』[南満洲鉄道株式会社京城鉄道局][南満洲鉄道株式会社京城鉄道局]不明、1 冊、29 頁、1－C－43

彦根高等商業学校、判読不能、№75、調査課

１８『仁川案内』岡本保誠、仁川商業会議所、大正 15[1926]年 5 月 1 日、1 冊、2+47 頁

彦根高等商業学校、２，２，１４、調査課

彦根高等商業学校、№77、研究部

１９『群山案内』[群山商業会議所][群山商業会議所]不明、1 枚、1－C－33

彦根高等商業学校、２，６，２７、調査課

２０『大邱案内』吉田由巳、大邱商業会議所、大正 12[1923]年 9 月 30 日、1 冊、108＋36 頁、1－C－30

彦根高等商業学校、１３，３，１９、№62、調査課

２１『たいきう』[大邱商業会議所][大邱商業会議所]大正 15[1926]年 9 月、1 枚、1－C－31

彦根高等商業学校、１５，１０，１３、調査課

彦根高等商業学校、№63、研究部

２２『釜山』[朝鮮総督府鉄道局][朝鮮総督府鉄道局]昭和 4[1929]年 4 月、1 冊、2+45 頁、1－C－70

彦根高等商業学校、４，９，３０、№3104、研究部

２３『木浦大観』[木浦府][木浦府]大正 15[1926]年 9 月 26 日、1 冊、62 頁、1－C－32

彦根高等商業学校、２，３，４、№64、調査課

彦根高等商業学校、№64、研究部

２４『生活状態調査（其一）水原郡』調査資料第二十八輯[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 4[1929]年 9 月 17

日、1 冊、6+256 頁（抄録）、1－C－110-1

彦根高等商業学校、７，１０，４、№10095、調査課

２５『生活状態調査（其二）濟州島』調査資料第二十九輯[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 4[1929]年 12 月 15 日、1 冊、7+174 頁（抄録）、1－C－110

彦根高等商業学校、５，１，１２、№3586、研究部

２６『生活状態調査（其三）江陵郡』調査資料第三十二輯[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 6[1931]年 1 月 31 日、1 冊、3+410 頁（抄録）、1－C－110-2

彦根高等商業学校、６，３，２、№5903、調査課

２７『生活状態調査（其四）平壌府』調査資料第三十四輯[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 7[1932]年 4 月 28 日、1 冊、5+386 頁（抄録）、1－C－110

彦根高等商業学校、７，６，１５、№9488、調査課

２８『生活状態調査（其五）朝鮮の聚落　前篇』調査資料第三十八輯[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 8[1933]年 3 月 30 日、1 冊、15+944 頁（抄録）、1－C－323

彦根高等商業学校、判読不能、№12583、調査課

２９『生活状態調査（其六）朝鮮の聚落　中篇』調査資料第三十九輯[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 8[1933]年 3 月 30 日、1 冊、10+594 頁（抄録）、1－C－223

彦根高等商業学校、判読不能、№12582、調査課

３０『生活状態調査（其七）慶州郡』調査資料第四十輯[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 9[1934]年 2 月 28 日、1 冊、24+562 頁（抄録）、1－C－110

彦根高等商業学校、９，４，１６、№13645、調査課

３１『生活状態調査（其八）朝鮮の聚落　後篇』調査資料第四十一輯[朝鮮総督府][朝鮮総督府]昭和 10[1935]年 3 月 30 日、1 冊、9+994 頁（抄録）

彦根高等商業学校、１０，７，１、№16543、調査課

この小稿では、CD-ROM に収録した資料のひとつの読み方を示すとしよう。そのときの主題は観光案内である（生活状態調査にかかわる資料の 24 から 31 までについては別稿とする予定）。CD-ROM に収録した

資料が、彦根高等商業学校収集資料というかぎられた範囲であれ、そのなかでどのような連鎖をもっているのかの一端をあらわし、これらの資料が植民地研究[6]や「観光」というテーマ[7]において、どのような〈読み〉の可能性をもっているのかを展望しよう。収録資料個々の解説を開陳するのではなく、あくまでわたしが読む彦根高等商業学校収集資料の見通しとなる。

まずは、CD-ROM に収録できなかった『朝鮮旅行案内記』（朝鮮総督府鉄道局、1929 年 9 月 20 日。1ーC一212。マイクロフィルム№.123）をみよう。朝鮮を旅行するであろうひとにその地をわかりやすく示すにあたって、本文では朝鮮半島に敷設された鉄道線に沿って官公署、旅館、名所が列挙されてゆくこととなる。案内記のそのはじめには、朝鮮の地理、気候、産業が説かれ、ついで朝鮮の現状が概説される（以下、引用にあたってはカタカナをひらかなに改めたり、句読点を補ったりする）。

> わが国はさきに朝鮮の独立と東洋の平和とのために、支那・ロシヤと戦端を開くのやむなきに至り、其の結果朝鮮はわが国の保護国となつたが、とかく民心安定せず、禍乱の源となる惧れあつたので、明治 43 年〔1910 年――引用者による。以下同〕これを併合し、京城に総督府を置き、総督をして統治の任に当らしめてゐるが、日韓併合の目的は次第に貫徹されつゝある。総督府に内務・警務・司法・学務・法務・殖産・逓信・鉄道・専売の九局及び山林・土地改良部の二部を置く。地方は十三道に分け、知事をして道の行政長官たらしめてある。道の下に府と郡がある。

ここにいう、1910 年の「併合」という出来事を確認しておこう。

1910 年 8 月 22 日に調印された条約第 4 条「韓国併合に関する条約」が、同年同月 29 日に公布・施行された。条約の条文はつぎのようにはじまる。

> 日本国皇帝陛下及韓国皇帝陛下は両国間の特殊にして親密なる関係を顧ひ、相互の幸福を増進し東洋の平和を永久に確保せむことを欲し、此の目的を達せむか為には韓国を日本帝国に併合するに如かさることを確信し〔た。〕

---

[6] この研究領域については戦後歴史学も現代歴史学もともに膨大な研究史がある。近年のまとまった論集としては、大江志乃夫ほか編『近代日本と植民地』全 8 巻、岩波書店、1992～1993 年、があるが、そこに観光を主題とした論稿はふくまれていない。その後、高媛「記憶産業としてのツーリズム―戦後における日本人の「満洲」観光」『現代思想』2001 年 3 月、同「「二つの近代」の痕跡――九三〇年代における「国際観光」の展開を中心に」吉見俊哉編『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社、2002 年、同「「楽土」を走る観光バス――九三〇年代の「満洲」都市と帝国のドラマトゥルギー」吉見俊哉ほか編『岩波講座近代日本の文化史』6、岩波書店、2002 年、などが出た。

[7] この研究領域についてはひとまず、山下晋司『バリ　観光人類学のレッスン』東京大学出版会、1999 年、を参照した。文献については、青柳周一から教示を得た。

この「確信」をもとに「併合条約を締結すること」となり、「併合」の目的とは日本と韓国の「相互の幸福を増進」することであり、ひいては「東洋の平和を永久に確保」することとうたわれている。そもそも「併合」に到る情況としては、

朕東洋の平和を永遠に維持し、帝国の安全を将来に保障するの必要なるを念ひ、又常に韓国か禍乱の淵源たるに顧み、曩に朕の政府をして韓国政府と協定せしめ、韓国を帝国の保護の下に置き以て禍源を杜絶し平和を確保せむことを期

していたというように、日本が韓国を保護国とした経緯が詔書（1910 年 8 月 29 日）にあげられている。だがその後の改善がみられず、「革新を現制に加ふるの避く可らざること瞭然」となったので、

朕は韓国皇帝陛下と与に此の事態に鑑み、韓国を挙て日本帝国に併合し、以て時勢の要求に応するの已むを得さるものあるを念ひ、茲に永久に韓国を帝国に併合することとなせり、

と天皇によって宣誥されたのである。条約の条文や詔書の勅旨に記されているように、この「併合」とは、韓国（大韓帝国）と日本とが合わさってひとつになるのではなく、韓国を日本に合してひとつにするとの謂であり、したがってこの出来事はまさに「韓国併合」なのである。くわえて勅令第 318 号によって、1910 年 8 月 29 日より「韓国の国号は、之を改め爾今朝鮮と称す」と定められた [8]。漢城も京城と改称され、そこに勅令第 319 号（1910 年 8 月 29 日）によって、「委任の範囲内に於て陸海軍を統率し一切の政務を統轄」する朝鮮総督がおかれた。

これからみてゆく資料は、この韓国併合後の 1923 年から 1932 年のあいだに発行された文献であり、1923 年に彦根高等商業学校に設置された調査課ないし研究部に、発行からそう時間を経ないうちにあつまった資料である。彦根高等商業学校が所蔵した文献の収集経緯についてはよくわかっていない [9]。思うにひとつには、人口や資源や市場の問題にかかわって移民や植民が論議される時代の要請として、朝鮮など海外の文献をあつめたり、それらがあつまったりしたのだろう [10]。商業地理から海外経済事情や植民政策までの授

---

[8] 以下、当時の地名はそのまま表記し、また「朝鮮」「朝鮮人」「満州」の名称をもちいることとする。

[9] 彦根高等商業学校が収集した文献については、『彦根高商研究部月報』（1928 年 6 月 1 日創刊）や『彦根高等商業学校調査課月報』（1931 年 1 月 17 日創刊。1939 年 5 日に『彦根高等商業学校調査課文献月報』と改題）によってたどることができる。

[10] 彦根高等商業学校商業及経済研究会では、教官の田中秀作を編輯兼発行者とした『パンフレツト』を 1926 年 3 月 12 日に創刊した。その第 2 号（1926 年 12 月 25 日）に京都帝国大学教授山本美越乃の「我国人口問題と移植民政策」（開校記念日講演会筆記）が掲載されている。移民や植民は彦根高等商業学校にとっても重要な課題だった。また後年のことになるが、1933 年 10 月の時点における、彦根高等商業学校の卒業生の就業先をみると、イシビヤ百貨店（大邱）、山邑酒造株→

業を担当した田中秀作は、「事務として図書課長を仰付かった。之は私が満鉄の時図書館に関係していたからであった……第二年目〔1924 年〕に中国語科の奥村講師と共に中国満蒙に出張を命ぜられ、中国関係の基礎的図書や資料を多量に蒐集することが出来、産業、経済、商業に関する調査資料等も満鉄その他から無数に連続的寄贈を受ける端緒を開いた」と「回想」している。こうしてあつめられた資料が、「後の調査課、東亜研究所、更に現在の日本経済文化研究所の資料室の基盤になったと思われる」という [11]。

彦根高等商業学校に蓄蔵されてゆく文献資料の所蔵それ自体に時代情況が濃密に籠もっていて、彦根における高等商業学校という学知が形成されてゆくのである。彦根高等商業学校にかかわる現存資料は、その刊行物とその収集資料がほとんどである。学校史にかかわるいわゆる一次史料はほとんど残されていない。彦根高等商業学校は、その刊行物と収集資料によって歴史のなかに位置づけられることとなるのであり、この小稿ではとくに 1929 年前後に収集された資料のいくつかを読むことをとおして、彦根高等商業学校という学知のいわば一斑をみることで全豹をトす試みとしよう。

吉田初三郎の鳥瞰図案内

資料 1～3 として、吉田初三郎の作品をおいた。1884 年に京都に生まれた吉田初三郎は（没年は 1955 年）、のちに「初三郎式鳥瞰図」と名づけられる多数の「名所図絵」をあらわして、その活躍の同時代に「現代の

式会社京城支店、三中井呉服店（京城）、京城府水道課、京城府庁税務課、慶尚合同銀行（大邱）、高瀬合名会社（釜山）、漢城銀行（京城）、朝鮮鉄道株式会社（京城）などがあがっているように（『海外事情研究』第 2 輯、1933 年 11 月）、彦根高等商業学校と朝鮮の官公署や企業とのつながりがたしかにあった。『彦根高等商業学校調査課要覧』（彦根高等商業学校調査課、1940 年 3 月）の「事業一班」のなかで「研究調査」としてあげられた 5 項目のうちの、第 3 項に「海外経済事情」として「我国と通商関係の密接なる諸地方の経済事情及海外新市場の調査」があり、第 4 項に「移植民」として「移植民研究室を設け〔1930 年 6 月〕、邦人の海外発展、移植民政策、移植民地事情等の調査研究」があり、第 5 項に「東亜経済事情」として「特に東亜研究室を設け〔1939 年 6 月〕東亜経済に関する研究」があがっている。移植民研究室と関連して海外事情研究会（1930 年）が、東亜研究室との関連で東亜事情研究会（1939 年）が発足し、海外事情研究会と東亜事情研究会の『会報』第 1 号が 1939 年 8 月に刊行される。こうした卒業生の海外での業務やいくつもの学内研究会の活動に関連して資料が収集されたと思われる。

本稿執筆中の 2003 年 4 月 24 日に滋賀大学附属図書館旧書庫 3 層で、「戦前資料（未整理）」と書いた紙の貼られた段ボール箱のなかから表紙の欠落した文書綴をみつけた。それは 1935 年 6 月 24 日付の欠号刊行物寄贈依頼状発送伺にはじまる彦根高等商業学校調査課の資料請求書綴だった（綴の最後は 1944 年の彦根経済専門学校の文書）。この文書綴により学内の調査課が請求のうえ寄贈をうけた資料の一端が判明した。

[11] 田中は「京大を出てから暫く大連の満鉄本社に入社し満鉄附属地の学校教員養成の仕事に従事しながら満蒙の地理を調査していた」という経歴を持つ（陵水三十五年編纂会代表芳谷有道編『陵水三十五年』1958 年）。

広重」あるいは「超広重」とよばれ讃えられた[12]。

大正元〔1912〕年処女作鳥瞰図の執筆以来、現在〔1930 年〕に至るまで二十星霜の間には、日本内地に勿論、遠く北海道、朝鮮、満洲、支那大陸の各地に渉つて、実地踏査の写生の上発表された作品は凡そ六百種を算し、名所図絵としての総刊行部数は二千万部にも上つてゐませうか、昨昭和四年度のみにても壱〇五種、百四十五万七千余部を発表されてゐるのであります（前掲「吉田初三郎先生の作品に就て」）。

上記の数値からすると、初三郎の鳥瞰図は 1 点あたり数万部が刊行されたばあいがあることとなる。こうした初三郎式鳥瞰図の大量頒布の背景として、20 世紀初頭の観光ブームが指摘されている。すなわち、

大正から昭和初期に起こった観光ブームもあり、初三郎人気は高まり、描いた鳥瞰図は 1600 点以上に達するという[13]。

1927 年 10 月には、「吉田初三郎先生作品頒布会」がはじまった。その発会の趣旨は、

昭和の御代に入りましてより特に先生の名声が高まり、自然旅行家乃至趣味家の間で、吉田初三郎先生の作品蒐集のためわざへ自費を擲つて日本全国各地に旅行され、少からぬ辛苦を重ねられる由を聞き及びましたので、先生はじめ同人一同、粛然として真に感激と感謝の念禁ずる能はず、せめて爾今新版のものは、発行の都度お送り申上げたら、どの位い喜ばれ、又どの位い御便宜になるかと考へ〔た〕

ことにあると述べられている（前掲「吉田初三郎先生の作品に就て」）。会員は一回分 2 円 50 銭の会費を払

---

12) 「吉田初三郎先生の作品に就て」吉田初三郎『絵に添へて一筆集』吉田初三郎先生叢書第一輯、観光社、1930 年、国立国会図書館所蔵。

13) 湯原公浩編『大正・昭和の鳥瞰図絵師吉田初三郎のパノラマ地図』別冊太陽、平凡社、2002 年。別冊太陽が特集を組んだように、この初三郎の鳥瞰図があらためて注目され、近年はいくつかの博物館で初三郎の鳥瞰図が展示されている。それらの図録やパンフレットをあげると、狭山市立博物館『レトロでモダンな地図の旅―鳥瞰図の世界』2001 年、新宿歴史博物館編『新宿歴史博物館特別展図録　特急電車と沿線風景―小田急・京王・西武のあゆみと地域の変遷』新宿区生涯学習財団、2001 年、東北歴史博物館編『観光旅行―大正～昭和初期のツーリズム』オークコーポレーション、2002 年、などがある。また未見の図録に『企画展「絵図にみる観光名所」―吉田初三郎の世界』高岡市立博物館、1995 年、『収蔵資料展　鳥瞰図絵師吉田初三郎』交通科学博物館、1998 年、『愛知県を中心とする鳥瞰図の世界―吉田初三郎とその周辺』江南市歴史民俗資料館、1999 年、『パノラマ地図を旅する―「大正広重」吉田初三郎の世界』堺市博物館、1999 年、『鳥瞰図の名手・吉田初三郎と名鉄電車』名鉄資料館、1999 年、『21 世紀にメッセージを託した画家　吉田初三郎の世界―愛知・岐阜を中心に』犬山市文化史料館、2000 年、がある。初三郎にかんしては、藤本一美『日本一の鳥瞰画仙・絵師　吉田初三郎の鳥瞰図原画目録稿』、私家版、1997 年、水野信太郎・水野由美「都市鳥瞰図都吉田初三郎」「資料　日本全国鳥瞰図一覧」金沢学院大学都市学研究所編『都市学研究』1、1999 年、住友和子編集室ほか編『鳥瞰図絵師の眼』ＩＮＡＸ出版、2001 年、などを参照。また初三郎の鳥瞰図をふくむ台湾の鳥瞰図集として、荘永明編撰『台湾鳥瞰図――九三〇年代台湾地誌絵集』遠流出版事業股份有限公司（台北市）、1996 年、がある（この図書の入手にあたって只友景士の協力を得た）。台湾をめぐる初三郎式鳥瞰図については、松金ゆうこ「昭和初期台湾における早すぎた刊行ブーム―鳥瞰図絵師吉田初三郎の足跡を通じて」という報告がある（『日本台湾学会ニュースレター』第 6 号、2003 年 3 月）。

って、初三郎の作品 12 種を入手することができた[14]。この作品頒布会は 3 年後の 1930 年 5 月には第 7 回をかぞえ、その時点で「新作名所図絵」がおよそ 80 種となり、頒布会会員は 3,000 名をこえていた。観光という趣向が大衆のものとなってゆくなかで[15]、新旧の名所を描いた、しかも上空から俯瞰する視点をもうけた奇抜な鳥瞰図として描かれた図画が蒐集の対象となることで、初三郎の鳥瞰図はひとびとの興味の的となっていった。こうした画像と文章によってなりたつ初三郎の観光案内を、ここでは「鳥瞰図案内」と呼ぶとしよう。初三郎自身も「観光社」（1923 年）や「バーザイビュ社」（1924 年）をおこして出版などの事業をおこない、また『観光』『観光春秋』を発刊したように（前掲藤本一美『日本一の鳥瞰画仙・絵師　吉田初三郎の鳥瞰図原画目録稿』）、「観光」という時代の趨勢を意識していた。

CD-ROM に収録した初三郎の鳥瞰図案内 3 点は、いずれも 1929 年に刊行された作品である[16]。『観光春秋』（第 7 号、1930 年 1 月 1 日、観光社）の「吉田初三郎先生昭和四年度月誌」（前掲藤本一美『日本一の鳥瞰画仙・絵師　吉田初三郎の鳥瞰図原画目録稿』所収）によると、1929 年の 2 月から 6 月にかけて初三郎は、

> 此の五ケ月間は朝鮮全道の大踏査に終始せられた。〔ママ〕……凛烈骨を刺す厳冬の候より洛東江の水やゝぬ

---

14) 送料は頒布会が負担し、さらに「規定の十二種以外、苟も吉田初三郎先生の作品とあれば、夫れが若し他所の印刷発行の場合には、何とかして其れを手に入れ、特別贈呈としてお送り申上げ、又若しどうしても手に入らない場合には、発行所を御通知申上げて御便宜を計つてきたのであります」と頒布会はその活動が「断じて営利を目的」としていないことを強調する（前掲「吉田初三郎先生の作品に就て」）。

15) ただし「観光」とはただの物見遊山だけではなく、他国の光華をみたり文物や制度を視察したり、あるいは国威を外に示すといった意味のある言葉でもある。岩倉使節団の報告書である『特命全権大使米欧回覧実記』に岩倉具視が記した「観光」（1875 年付）の文字も、現在の通念とはことなって、その語に籠もる政治の所在をあらわしている（田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記（一）』岩波書店、1977 年）。そこでは「例言」において「大使公務の余、及ひ各地回歴の途上に於て総て覧観せる実況を筆記す、是を以て回覧実記と名く、故に使節の本領たる、交際の応酬、政治の廉訪は、反て之を略す」と記しながら、たとえば「合衆国建国の由来」「幅員人口」「山脈原野」「気候」「農牧産物」「礦産製作」「貿易の景況」「人種風俗」「普通教育」「宗教」「貨幣度量衡」「合衆国立憲の説」「太平大楽会　愛国心の説」などを見聞きして、それらを報らせている。

16) 研究所では本 CD-ROM 発行後、初三郎の鳥瞰図案内 3 点を発見した。①『三中井呉服店御案内』（三中井呉服店、1929 年、請求番号なし）、②『御遷宮奉祝神都博覧会』（御遷宮奉祝神都博覧会協賛会、1930 年、3―E―110）、③『金剛山電鉄』（金剛山電鉄株式会社、年不詳、1―C―488）。①は「三中井呉服店を中心とせる大京城案内鳥瞰図」（赤い短冊の内題）で、「御挨拶」として「我が京城は本邦六大都市の一つとして人口四十万余、北に白岳、南に南山、西に仁王、東北に駱駝の諸山が蟠踞し連山環擁して天成の城郭を形造り、漢江の流れは城外の東南一帯を繞り山河襟帯の形勝はさすが李朝五百年の都城たりしを點頭せます。／日韓併合以来市井の発展は殊に著しく最近は都市計画によつて更に其の面目を改めやうとしてゐます。／本年は恰も施政二十年に会し、これが記念博覧会をこの地に開催されまするに当り自然、鮮内は勿論全国よりの入城者を以つて未曾有の賑ひを呈せられる折柄、弊店は聊か感ずる所あり、平素の御愛顧を酬ゆる為、今回特に近世鳥瞰図の創始者として斯界の権威吉田初三郎画伯を煩はし、この麗筆になる本図絵を発行致しました。幸何かの御便宜にもとなりますれば幸甚の至りに存じます」と述べている。「吉田初三郎先生作品頒布会種目内容一覧」にはその第 5 回 12 種のひとつに「京城三中井呉服店」があり、「朝鮮の松坂屋とも大丸ともいふべき三中井呉服店の案内をかねて、モダーン京城一日の遊楽行程を示す」と付記されている（前掲『絵に添へて一筆集』所収）。③は資料 2『朝鮮金剛山交通大鳥瞰図』とほぼ同じ構図ながらもいくぶんダイナミズムに欠ける鳥瞰図案内となっている（赤い短冊内題は「世界の多山金剛山交通案内鳥瞰図」）。

るみそめし初春三月、さては百花一時に競ひ咲く南鮮の五月、金剛一万二千峯に新緑もゆる頃に至るまで、北は白頭山、図満江〔図們江あるいは豆満江〕、鴨緑江――元山に、清津に、雄基、朱乙、会寧に、さては平壌に、鎮南浦に、成川金剛に、或は首都京城に、忠南江原の諸道に、群山に、多島海に、其の足蹟鶏林十三道及ばぬ隅もなかつたのである。かくて釜山と仁川とを殿りにして正に百五十日間、昭和四年度の半ば近くを、チヨンガーとヤンパンと、そしてキーサンの雰囲気の間に南から北へ、東から西へと縦横馳駆された次第である。

「吉田初三郎先生昭和四年度作品目録―昭和四年十二月現在」（同前）には、「公刊せし図絵」「目下印刷中の図絵」「原図完成の分」「原図として御所蔵の分」「ポスター並二其の他」として 105 点があげられ、そのうち朝鮮にかかわる作品は 32 点と思われる [17]。朝鮮半島を縦横に実地踏査した初三郎は、1929 年度の画業の多くを朝鮮半島の各地を描くことにあてたのだった。

初三郎は公刊された鳥瞰図案内に、しばしば「絵に添へて一筆」と題した一文を付している。そこでは、たとえば金剛山については、

夫れ金剛は八万由旬、壱万弐千峯、曇無竭菩薩常に其の間に住すとかや、仰げば玉荀高く連ねて春の霞を微茫たる下天の底に踏み静め、秀峰巍々として青嵐に聳えては、緑葉ひとり颯爽たる天地を包む、忽ち捲きおこす一連の夏雲は、雨となり霧となつて、つやゝかなる岩貌いよゝ変幻奇怪の妙を示し、層々たる深淵は巨嵓を抱いて飛龍昇天の状をなせり。ふりさけ仰ぐ千山万岳、何れか碧潭を湛え、巨瀑を架し、屹岌として天巧の無双を誇らざらんや。……時はよし晩春初夏、或は夏雲の密を破つて温泉の清爽にひたり、蒼海の波濤をしのぎ、或は錦繡のとばりをついて長安、温井の両ホテルに憩ふて松籟の妙趣を聴く、よしえやし雪ふかくとも、浄身更らに奇峰の粧ひを見るを得べきか（資料 2）、

と記してみずからの感興をあらわし、また慶州の春を、

白茶けた大地には青草が活きへと萌えあがつて、陽炎がひたむきにゆらめきのぼり、軽い砂塵が其の上に舞つてゐた。そして南川の水光が目にしむやうに痛かつた。……慶州に現存する遺蹟遺物は、何れも一千年乃至二千年前に跨るものばかりである。……新羅一千年の栄華の巷に、花は咲き星は移り、人

---

[17] この目録には、『朝鮮大図絵』が、総督府、鉄道局、咸鏡南道、忠清南道、全羅南道、全羅北道、咸鏡北道、慶尚北道、平安北道、黄海道、江原道、全鮮十三道交通、の 12 種にわたってあげられ、金剛山にかかわる鳥瞰図に、『金剛山名所交通図絵』『金剛山電鉄沿線図絵』があり、慶州については、『朝鮮古都慶州図絵』がある。

は亡び草は青んで、今やさんへとして慶州に春は訪れたのである。……春の野には霞が棚引き、蝶が舞ふ、其の霞となり蝶となつて慶州を彩るものは、伝へへて今に朽ちせぬ色様々な物語である。或物は神厳に、或ものは優婉に、又あるものは綿々として尽きぬ悲恋を訴へ、縷々として絶えぬ人間味を物語る（資料 3）。

と言祝いだ。自然を讃え歴史を懐古する妙趣のある雅文や「世界の名山朝鮮金剛山探勝案内」「古蹟遊覧案内」などの観光地紹介の文章と、大地に立つひとがほとんどとりえない視点からあらわされた色鮮やかな画像とからなる初三郎の鳥瞰図案内は、まさに「斬新で愉快ともいうべきデザイン力だからこそ、ひとびとの夢をふくらませ、旅へと誘っていったのだろう」（前掲『大正・昭和の鳥瞰図絵師吉田初三郎のパノラマ地図』）との評価が的外れとはみえないテキストだといえよう[18]。

資料 1～3 を計測すると、たたんだ状態でのおおきさは順に縦と横が 27cm×13cm、27cm×12cm、19cm×12cm、ひろげたときのそれは、27cm×129cm、27cm×131cm、19cm×99cm となる。これらの鳥瞰図案内は、ちいさく折りたためば懐中にしのばせられるし、ひろげても両腕のあいだにおさまる。また、旅行のさなかに現地で、あるいは事前に家でひろげることで、その土地の現況や歴史を知るための手引きともなれば、ときには、まだみぬ土地への想像力をはたらかせたり帰郷してから旅程をあらためて想起したりするときの便（よすが）ともなるだろう。

初三郎の鳥瞰図には、もちろん宣伝のための謳い文句とはいえ、その同時代においても、「其の独特」「図案的才能に於て時流を遥かに抜くもの」「全く圧冠的精彩を放つ」との高評がよせられた（前掲「吉田初三郎先生の作品に就て」）。いまでは、その独特さや異彩とは初三郎式鳥瞰図の構図にあらわされた「デフォルメ」なのだとよく指摘されている。すなわち、

大正期から昭和中期にかけて、初三郎は、……鳥の目と広角の魚眼レンズの目をミックスした多視点魚眼画法による鳥瞰名所図絵の技法を完成した。そして、樺太や朝鮮、中国、台湾などを含めた各地を旅しながらスケッチをし、ダイナミックな鳥瞰図の構図を夢想し続けた。こうして誕生した彼の作品の魅力はどんなところにあるのだろうか。

---

18) たとえば同じく金剛山を描くといっても、『金剛山探勝』（朝鮮総督府鉄道局、年不詳、1－C－489。絵図には「朝鮮金剛山交通絵図」との内題）はその単調な色彩や平板な構図のために初三郎の鳥瞰図案内よりどうしても見劣ってしまう。またこうした初三郎の鳥瞰図案内がもつ力のゆえに、『群山案内』（資料 19）のようにその模倣も登場する。ただしまねても稚拙にしかならない鳥瞰図は、それゆえに初三郎の技量と視点の卓抜さをあらわしていよう。

と問うて、それこそが「なんといっても錦絵のようにカラフルな色彩と大胆なデフォルメ構図」なのだとみせられるのである（藤本一美「「大正広重」吉田初三郎の世界」前掲『鳥瞰図絵師の眼』所収）。同じように、

> 大胆なデフォルメ／変幻自在が旅情を誘う／初三郎鳥瞰図の描き方は、正確な地形図と現地での入念な踏査写生を元にしながらも、独自の工夫が凝らされているのが特徴だ。誰もが愛してやまぬ富士山や海外の都市など、見えないはずのないものが遠くに描かれていたり、地形が大きくゆがめられていたりと、まさに変幻自在（前掲『大正・昭和の鳥瞰図絵師吉田初三郎のパノラマ地図』）、

というぐあいの評価が初三郎の鳥瞰図をめぐってくりかえされている。そして、さきにみたような初三郎の鳥瞰図案内に籠もる、それをみるひとの夢をふくらませ旅へと誘う力の源泉がこの「デフォルメ」だと評されるのである。

『朝鮮大図絵』『朝鮮金剛山交通大鳥瞰図』『慶州図絵』（資料 1、2、3）のいずれをみても、その画中に富士山が描かれ、さらに日本列島の東京や伊勢神宮や日本ライン [19] にとどまらず、海のむこうのとおくに樺太やシベリヤ（資料 1）、大連や台湾（資料 2、3）までをもみせる構図がとられている。とりわけ、その名のとおりに朝鮮の全域をみせようとする『朝鮮大図絵』は、朝鮮半島西方の黄海上空に視点をさだめて白頭山を中央におき、半島をおおきく ⊂ 記号型に湾曲させて南北にのびる半島を画中の左右におきかえて、その全域が望めるように朝鮮半島を「デフォルメ」している。

またこうした「デフォルメ」は細部の拡大といった技法ともなり、たとえば『朝鮮大図絵』においては、京城のなかでも朝鮮総督府の建物がひときわおおきく描かれているし、前掲『三中井呉服店御案内』においても、鳥瞰図案内の目的である三中井呉服店を案内するために、京城の街中に府庁よりも南大門よりも京城駅よりも、そして朝鮮総督府よりも巨大な建造物として三中井呉服店があらわれているのだ [20]。

すでにみたように、初三郎が朝鮮半島の各地を巡遊し、それらの地を鳥瞰図として描いた 1929 年には、朝鮮半島は日本の版図となっていた。だが、朝鮮半島の「古都」を鳥瞰図案内としてあらわそうとすると、

---

[19] 日本ラインは、その蘇江に初三郎の画室があったり、彼がおこした観光社があったりしたなど、初三郎ゆかりの地だった。この小稿でたびたび参照している『絵に添へて一筆集』の発行所兼印刷所は「名古屋市外犬山町日本ライン蘇江／観光社」となっている。初三郎は、1923 年に『天下之絶勝日本ライン名所図絵』を、1928 年に『日本ライン御案内　日本八景木曽川』を発表している（前掲『大正・昭和の鳥瞰図絵師吉田初三郎のパノラマ地図』）。

[20] 三中井呉服店は京城、釜山、大邱、平壌、元山、咸興、群山、木浦、興南、鳥致院、晋州、京都、東京、横浜に「本支店」があった。京城の店舗は 5 階建ての新館と 2 階建ての旧館の 2 棟で、後者の 1 階から順に実用品各種売場、呉服売場、洋品雑貨・旅行用品売場、児童・婦人服売場、大人服新型陳列場・洋服売場、三中井食堂、臨時特別陳列場、そして屋上が子供の国となっている百貨店でもあった（前掲『三中井呉服店御案内』）。

たとえば『慶州図絵』（この鳥瞰図には赤い短冊に内題として「朝鮮古都慶州名所交通鳥瞰図」と記されている）の「絵に添へて一筆」には、そこが「古都」であるがゆえに、朝鮮半島における新羅の建国が記される。

新羅が国土を樹てたのは、その始祖朴赫居世が斯櫨六村より起つて国を徐羅伐と名づけ、此の慶州に都したに始るといふ。

と記され、それは「我が崇神天皇の四十一年である」とまず示され、ついでそれは「今からは一千九百八十五の昔」のことだとかぞえられるのである[21]。

その地の絶景をめぐっても、たとえば「未だ朝鮮金剛山ほどの雄大、崇厳なるを知らない」と素直に告白する初三郎は、つづけて「恐らくは今や天下に喧伝さるゝ、日本内地八景廿五勝の各長所を打つて一丸となしたるもの、即ち一つの金剛山を形容すべき最も勝れたる言葉ならずや」と讃える[22]。つまり、初三郎は、朝鮮をあらわすに日本を規矩としてしまい（崇神天皇暦、日本内地八景廿五勝）、しかし他方で、建国をめぐる日本と異なる朝鮮半島の歴史[23]も、日本の名所をしのぐ景勝としての朝鮮金剛山をも賛美できるのである。

では、「新羅一千年の栄華」と対照したときの朝鮮の現勢はどのように書かれるのか。

曾つては任那を滅して日本府を除き、唐と力を併せては百済、高句麗を亡し、やがて唐の勢力を駆逐して半島を統一せし当時の面影やいづこ、

との懐旧を胸にして、「旧都の春色」に「無限の哀愁」が感じとられるのである（前掲「新羅の古都・慶州」）。朝鮮半島における歴史の始原がたどられても、そこから現在に到る推移は減衰というほかないと貶められてしまうのだ。

また絶景としての金剛山はだれに所有されるのか。

まさに世界に誇るべき、唯一無二の絶勝として、われ等日本人の宝玉でなくて何であらう。〔ママ〕・・・・・敢

---

21) 朝鮮総督府鉄道局が編集した「新羅の古都　慶州（朝鮮慶尚北道）」（前掲『慶州図絵』所収）もその冒頭で「慶州は新羅一千年の旧都、我が寧楽の都にも比すべきところ」と紹介する。このように朝鮮半島の歴史が想起されても、それが日本歴史の長さのなかであれば、それと対照された位置におかれるのである。

22) 吉田初三郎「朝鮮漫筆」（二）『観光』第3巻第6号、1927年12月15日。この資料のコピーは吉田博實から提供をうけた。なお初三郎が描いたこの文章の挿図（「昭和二年秋／金剛登山駕」）には、洋装でチェアに座り、それを前後ふたりで担いでいる様子が描かれている。

23) 朝鮮の平壌をめぐっても、初三郎は「平壌を物語るは、即ち朝鮮三千年の歴史を物語るものであり、平壌の風光情趣を伝へるのは、とりもなほさず、朝鮮の古く懐しき絵巻を展開するに外ならない」と日本と異なるその地の歴史を示している（「平壌」前掲『絵に添へて一筆集』所収）。

て私は朝鮮為政の当局につぐ。／冀くば東洋人のプライドの為に将た世界人の共楽の為に一日も早く、金剛山交通の完備と、そのほまれある宣伝に、より一層の努力あらむ事を切に祈る。

つまり、「世界に誇るべき」金剛山を世界にむかって開かれた「唯一無二の絶勝」とすることは、「東洋人のプライド」をうちたてるひとつの基となるというときに、そもそもその金剛山は「われ等日本人の宝玉」にほかならないというのだ。もとより 1929 年は「併合」から 19 年のときであり、「四季とりべに変化の妙を示すところ世界第一勝」と讃えて「金剛山を一躍世界の人気の中心たらしめ」ようとすすめる初三郎も、「名勝金剛山」を名指すにあたって、「我が朝鮮を代表する」と呼びえたのだった（前掲「朝鮮漫筆」二）。

こうした意識は鳥瞰図案内の文章にあらわれた、朝鮮半島の歴史をめぐる時期区分にあらわれる歴史意識ともかかわっている。すなわち、朝鮮の「面積地勢」「区劃」「気候」「交通」「通信」を記すなかで、「虎臥す野辺と謳はれし朝鮮半島も、併合以来、文化の光り日に洽く」（交通）というように、1910 年の「併合」を劃期とする、しかもそれ以降の変化を是とする（たとえば「金融」が「併合後、経済界も面目一新し」と紹介されたように）歴史意識である（『朝鮮大図絵』）。こうした「併合」後の発展を祝福するような文言がならぶのと同じ面に、他方で「李朝五百年の王都にして、朝鮮の首都たり」（京城）や、「高麗朝四百七十年の王都にして、一に松都と称し、当時の遺蹟存するもの多く」（開城）と記されているのを照らすと、かつての王都の歴史をしのぐ時間が「併合」後に流れ出したとの歴史認識があらわれていることが明瞭にみてとれるだろう。

また、初三郎の鳥瞰図案内それ自体のなりたちにかかわっても、たとえば『朝鮮大図絵』には、「昭和四年六月参日　鎮海要塞司令部検閲済／昭和四年六月五日　鎮海要塞港部検閲済／永興湾要塞司令部検閲済」と明記されているように、これらの初三郎による鳥瞰図案内は、「併合」後という時間において、朝鮮総督が「一切の政務を統轄」する空間を描いた、というテキストにほかならないのである。この折本の裏表紙には、「朝鮮総督府」と明記されている。初三郎の鳥瞰図案内にあらわれた鳥瞰という視線は、朝鮮総督府も共有しているのである。

ならば、朝鮮半島を対象とした鳥瞰図に富士山や日本ラインが描かれていても、それらはいずれも同じ日本の領域なのだから、不思議ではない。樺太や台湾が描かれていることも同様に理解できるし、また、描かれた奉天や上海をみれば、そこには、その後の日本と東アジアをめぐる出来事を予示しているともいえる。その意味で初三郎の鳥瞰図案内にあらわれた「デフォルメ」とは、描く対象とした地形を画中にはいるよう

におおきく曲げたことにとどまらず、またみえるはずのない場所を画中に描きいれたというだけでなく、画法に強度の遠近法（パースペクティヴ）をもちいて、まだかたちを明瞭になしてはいないその後の東アジア世界の全体像を、ひろく展望したとわたしにはみえる。いうならば、資料 1～3 という初三郎の鳥瞰図案内には、現在までの歴史が未来にむけて折り曲げられているのである。

では、日本人である初三郎が描いた朝鮮半島をめぐる鳥瞰図案内には、日本という位置からみた東アジア世界についての歴史認識しか籠もっていないのだろうか。ここにはもうひとつみなくてはならない「デフォルメ」が描かれている。

わたしたちに馴染みのある日本図というと、世界地図のなかではたいてい、北海道が右上におかれ、そこから左下へ本州、四国、九州と続く 4 島を中軸とした日本列島像が思い浮かべられるにちがいない[24]。このような日本列島像は、資料 1～3 では望むべくもないのだ。資料 1 は『朝鮮大図絵』というその名にみあうように朝鮮半島の全景を画中におさめ、その左におかれた日本列島はおおきく左曲がりに湾曲していて、左先端のほうの青森から札幌にかけてはほぼ水平線と重なっている。資料 2 は画面の中央から左右に金剛山を開いてみせ、左の端ちかくの釜山から白い点線で示された航路のさきに対馬、壱岐、門司、下関、東京と続く日本は、東京より左におおきく描かれた富士山を最高峰とするおおきめの島のようにみえる。このように単独の島とみせられる日本像はともかくも、資料 3 の『慶州図絵』では、やはり釜山からのびる白色点線のさきにみせられる日本列島は、関門海峡のあいだに四国を望み、富士山をほぼ中心にすえた本州を左方向にのばして、その先にすこしの断絶をおいたうえで、左に北海道と樺太を配置している。かつてもいまも、おそらくおおくの日本人が思い浮かべるであろう固定したひとつの日本列島像が、初三郎の鳥瞰図群のなかではその島々の配置がばらばらに崩されてしまうのである。

こうした日本列島像の崩弛はさらに強まる。『台北市鳥瞰図』（1930 年。以下、とくにことわらないかぎり初三郎の鳥瞰図案内は前掲『大正・昭和の鳥瞰図絵師吉田初三郎のパノラマ地図』所収の版を参照した）は、左右に山をわけたその中央に台北市街をおき、そのむこうの彼方に、九州と四国、そして右にながくのびる本州（やはり富士山をめだたせている）という配置として日本列島を描く。『樺太観光交通鳥瞰図』（1936

---

[24] たとえば、福沢諭吉の『西洋旅案内』（1867 年）巻之上、『掌中万国一覧』（1869 年）、『世界国尽』巻一（1869 年）の挿図にみえる日本列島像はほぼこのかたちとなっている（『福沢諭吉全集』第 2 巻、岩波書店、1959 年、所収）。初三郎の鳥瞰図案内と同時代の日本列島図としては、『清津』（清津商工会議所、1932 年、1－C－182）の表紙の地図もここにいうかたちをとっている。

年）は、島のかたちを画中の左右にながくのばしたうえで、その左端を画面の奥に湾曲させて、樺太の右端からのびる弧の延長線上に稚内をおいて、そこから右にのびる弧に日本列島を、左への弧に千島列島をみせている[25]。台北や樺太に焦点をあわせた鳥の眼からみおろした世界のなかでは、日本列島の島々のあいだにあったはずの繋縛力が弛んでしまい、ひとびとの想起する日本列島像が崩れてしまうのだ。

そもそも初三郎は『日本交通鳥瞰図』（1922 年）において、ハバロフスクかウラジオストクの上空からみおろしたような日本列島像を描いていたし、『日本海中心時代来る』（1938 年）というポスターでは、中国大陸の左側に　）　記号型にはりつくように日本列島をおいている。おおきく日本列島のほぼ全体を画中におさめようとするときに、その弧状列島をどちら側に湾曲させるのかどこからそれをみおろすのかをめぐって、多くのひとびとを支配する通念から初三郎の鳥瞰図は自由だったといってよい。ならば、鳥瞰図を描くときに慶州や台北や樺太を主題としたばあいはなおのこと、日本列島は弧状としても列島としても描かれないばあいがでてくるのは当然でもある。

初三郎の図像のなかにある日本をかたちづくったこの鳥の眼がみる視線（bird's-eye view）は、いわゆる「外地」を主題としたときにだけ獲得できたわけではない。たとえば、『京都市を中心とせる日本全国名所交通主要苗山地鳥瞰図』（1929 年）では、京都を手前において U　字型に湾曲する弧状列島は、右奥は樺太からシベリヤまで、左奥は朝鮮半島の白頭山にまでつらなっている。また『北海道鳥瞰図』（1936 年）は、北海道といったときにわたしたちがほぼ共通して思い浮かべる星型とも菱型ともいえるくだんの姿ではなく、襟裳岬―釧路の線からはるか南東海上の上空から鳥瞰して、知床半島と根室半島から千島列島にのびる線と、宗谷岬から樺太にのびる線とを弧の両端とする歪な U　字型として北海道をみせている[26]。

『金剛山交通大鳥瞰図』や『慶州図絵』、そして『朝鮮大図絵』を描くときに画中に日本を組み込んでしまった鳥瞰図絵師の初三郎。こうした鳥瞰の視線には、すでにみたように、絶景の金剛山を「日本の宝玉」といってしまう初三郎に代表されるような当時の日本人の朝鮮観や、それをささえる「併合」という制度や事実が直截に反映しているともいえよう。他方で、初三郎の図像は鳥瞰という視線をもうけて、かつ立体とい

---

[25] もちろんどうにも日本列島を描けない視角をとるばあいもある。たとえば、『大連汽船航路案内』（1929 年）や『大連』（1928 年。ここにはロンドン、パリー、ベルリン、モスコーも遠望する）、『釜山商工一班』（1929 年）はいずれも、画面奥に中国大陸や朝鮮半島を配したため、日本列島は画中からはずれてしまう。

[26] ただし、『京都市を中心とせる日本全国名所交通主要苗山地鳥瞰図』と『北海道鳥瞰図』が「外」地という視線とまったく無縁ということはできない。それというのも、前者はその作製の目的が 1929 年に京城で開かれた朝鮮博覧会への出展だったし、後者の北海道は近代日本が自己に組み入れた外部でもあるから。

う構成法をとったがゆえに、平面の地図とはちがって、弧状の列島としての日本のかたちをどのようにも描けるようになり、そこでは弧であることからも列であることからも自由に日本図をみせられたのである。

これらの鳥瞰図案内が作製されたのが、1929 年だった。満州事変からアジア・太平洋戦争に到るいわゆる十五年戦争の前夜としての 1929 年。他方で、関東大地震による「災禍」の受難を一因として、「文化の紹復、国力の振興」「国家の興隆と民族の安栄、社会の福祉とを図る」ために「国民精神を涵養振作」せよと告げた詔書（1923 年 11 月 10 日）が発せられてから、昭和改元（1926 年 12 月 25 日）、明治節制定（1927 年 3 月 3 日）[27]、天皇即位(1928 年 11 月 10 日)、憂うべき「国民精神の弛緩」という事態に対処するために「国体観念を明徴にし、国民精神を作興すること、並に経済生活の改善を図り、国力を培養することに帰著」することを目指す「教化動員」の訓令（1929 年 9 月 10 日）[28] までの時間を、19 世紀後半以来つづくナショナリティの形成と保持をめぐる（地震と戦争にはさまれた）ひとつのまとまりとすると、その一連の過程の終点となる 1929 年――1929 年とは、連続する戦争の時代の始期直前であり、継続するナショナリティの構成をめぐるひとつの到着点でもあった。このように、初三郎が資料 1～3 を描いた年をひとつの〈あいだ〉としてとらえてみると、初三郎式鳥瞰図のなかの「デフォルメ」とは、膨張しながらもひとつであろうとする強大な日本ということと、しかしそれが見方によっては内にばらばらになる危機を抱えた脆弱な日本でもあることとの〈あいだ〉のあらわれを、そこにみるこができるのだった。

観光される朝鮮、観光する日本人

資料 4 と資料 5 の『朝鮮旅行案内』は、ひろげると縦横 54cm×38cm のおおきさとなり、折ってゆくと 19cm×10cm にまでたためる旅行に携行可能な折本である。1928 年版（資料 4）と 1929 年版（資料 5）とでは、たたんだときに表となる絵柄が異なるものの（前者は南大門の光景、後者は馬上の老翁の姿）、ひらいたときの外側に記された鉄道沿線案内はほぼ同じ、内側にひろがる「朝鮮鉄道及航路図一縮尺三百万分之一」

---

[27] この詔書は「朕か皇祖孝明、明治天皇威徳大業夙に曠古の隆運を啓かせ」たことを想起して「臣民と共に永く天皇の遺徳を仰き明治の昭代を追憶する」ことをうたっていた。
[28] この訓令第 19 号は文部省から直轄学校、公私立大学、高等学校、専門学校に宛てられた。

はまったく同じ、地図の左に写真を配する構図は同様ながらも、その写真の被写体は異なる、という異同をみせている。鉄道に沿って観光案内をくりひろげるという手立ては初三郎の鳥瞰図案内と同じながら、しかしここに載せられた地図は、立体図でも「デフォルメ」されたフィクションでもなく、1/3,000,000 に縮小された朝鮮半島地図である。ここには、さまざまな角度と縮尺で切りとられた「写真」も掲載されている[29]。

資料 4 に記された「鉄道沿線案内」は、「昔の内地朝鮮の交通は博多から壱岐を経て対馬に渡り其処から朝鮮の山を目標に漕ぎ寄せたものらしい、幸ひせられた凪の海路でさへ二日を要したと云ふ」「関釜連絡線の横付になる釜山桟橋には、船から十数歩で奉天行の汽車が待つてゐる」「三浪津は梨の名産地で、馬山線の分岐駅、風光明媚の鎮海」「あと見送る南山の艶姿に心ひかれつゝ京城を発し隧道を出づれば新村の松原が続き、白帆左窓に笑む水色を経て一山の右窓には高峰山が見える」「一面風光の明媚、空気の清澄、夏季気温の低涼を以て知られ、郊外松濤園海浜は朝鮮第一の海水浴場として夏季賑ふ」「汽車は咸興沃野を北に李太祖を祀る本宮を経て日本海に出で西湖津、呂湖、退潮の漁業根拠地を過ぎ、右窓に退潮湾の海色を賞でつゝ幾つもの隧道を潜つて行く」というように、釜山から会寧までの鉄道沿線の各名所を報せている。

案内される場所には史蹟もある。「西鮮の中心都市平壌である、商工都市としての平壌、古蹟名勝地としての此地は視察に遊覧に見るべきものが多い」「咸興に著く。地は李太祖の発祥地で附近には名勝旧蹟を多く持つてゐる」というぐあいにつづき、史蹟を報せることは同時に歴史をさかのぼるきっかけともなる。すなわち、韓国から李氏朝鮮からもさらにさかのぼって、新羅へ――「慶州は新羅一千年の都城址、一度は訪ふべきである」「月井里では新羅の末彗星の如く現はれた泰封国の城址を左窓に眺め」、百済へ――「橋にかゝれば江水鳳山の翠色を沈めて帆影点々遥かに霞む緑山は百済創国の南漢山」「扶余は百済の旧都で斉明天皇の御代百済救済のため派遣された阿部比羅夫、上毛野稚子等が唐羅聯盟軍に敗北した泚泗城と白馬江等の旧蹟がある」、高麗へ――「開城に著く。此地は高麗朝の旧都で松嶽山麓の栄華を偲ぶ王宮址、其他の古蹟めぐりは一日の遊に価ひする」と到り、いよいよ「清川江を渡れば博川への乗換駅孟中里、朝鮮創国神代史の舞台を

---

29) 初三郎の鳥瞰図案内も地図や写真と無縁ではなかった。『朝鮮大図絵』には朝鮮半島の地図と「朝鮮総督府庁舎」「釜山桟橋」「馬山」「大邱」「京城」「朝鮮神宮」「昌徳宮秘苑」「仁川港」「群山」「木浦」「開城」「平壌（大同門）」「鎮南浦」「新義州」「金剛山」「元山」「咸興」「清津」の風景写真があり、『朝鮮金剛山交通大鳥瞰図』には「外金剛奥万物相の奇観」「海金剛」「外金剛九龍淵瀑」「内金剛万瀑洞の渓谷」の風景写真、『慶州図絵』には「慶州附近」の地図と「鶏林」「鮑石亭」「四面石仏」「芬皇寺九層塔」「仏国寺」の風景写真がある。鳥瞰図案内のこうした構成が初三郎の発案なのかはわからないが、「デフォルメ」をその蘊奥とする初三郎式鳥瞰図も地図や写真とともにあって鳥瞰図案内となり得たとすると、朝鮮を描いた資料 1～3 においては、初三郎式鳥瞰図が発信する「デフォルメ」もみるものをつねに現実に引き戻そうとする綱引きにさらされていたといえよう。

なす妙香山は此奥地に在る」と、朝鮮固有の始原となる「神代史の舞台」にまで案内が到達するのである。

史蹟ということでは、そこに戦蹟もふくまれる。想起されるのは、16 世紀末の豊臣秀吉によるいわゆる朝鮮出兵である（壬辰・丁酉倭乱／文禄・慶長の役）。「秋風嶺は嶺南北の分水線、文禄の時、黒田、小早川の秋風嶺越えを阻止せんとした鮮将の忠魂碑がある」「文禄の役三たび日本軍を撃破し、朝鮮軍の意気を示した権慄勇戦の幸州城は此山嶺に在る」「文禄の時鍋島直茂の本陣が置かれたのも此地〔咸興〕」「邑城は往年加藤清正の武将加藤清兵衛が百余日の籠城に辛苦を嘗めた由緒ある処である」「文禄の役此地〔会寧〕の府使鞠景仁なるものが京城から遁れ来つた二王子を縛し、加藤清正の軍下に投じたと云ふ」と、その戦蹟は案内地として列挙するに事欠かない。

その跡が案内される戦争は秀吉の軍が朝鮮半島を蹂躙したそれだけでなく、「永興は古来咸南の重鎮であつた名邑、李王家祖先が屢々女真族と戦ひ功を挙げた土地」があり、また「成歓駅の後丘右窓遥かに聳ゆるは日清の役大島旅団の奮戦地、松崎大尉の忠魂碑で安渡川を渡れば京畿道の米産地平沢に著く」「定州は日露の役彼我騎兵最初の衝突地点、北方遥か右窓には加納中尉の戦死記念碑が聳えてゐる」といえば、近時の日本と清国やロシアとのあいだの戦争にかかわる地も戦蹟として案内されている。

朝鮮半島に勃興したいくつもの政治体、朝鮮半島に展開したさまざまな戦争――朝鮮という領域のうえの歴史上の出来事として、それらがすべてひと筋の時間の流れとして記されるし、また「鉄道」というひとつにつながった線に沿った史蹟として案内されるのだった。その複数の鉄道線路を結ぶのが、「右窓に近く漢陽の高台に鎮座ましますの朝鮮神宮を拝しつゝ、汽車は半島の首都京城に入る」とあらわせられる首都京城である。そこは、「祭神は、天照大神　明治天皇の御二柱、畏くも半島鎮護の神として御迎へ奉つた」（前掲『朝鮮旅行案内記』1929 年）朝鮮神宮の所在地である。

この旅行案内は、段と文字の級数をかえて、「朝鮮視察旅程」「遊覧旅程」「産業視察旅程」といった 3 とおりの旅行日程の提示や、「直営ホテル」情報、「旅行上の注意」も伝達している。雅文の洒脱さや画法の妙趣に富んだ初三郎の鳥瞰図案内に照らしてみると、この 2 葉の『朝鮮旅行案内』は旅行案内の導きに必要な正確さを目指しているようだ。まちがいのない旅行をしてゆくためには、してはならないことも知っていなくてはならない。「左の場所は要塞及要港地帯であるから写真の撮影及描写は出来ない。／釜山附近、馬山鎮海附近、元山附近、鴨緑江鉄橋両橋台附近」――という「撮影禁止」場所についての案内は、どこのなにを「要塞及要港」として指定するのかにあらわれた時代情況を映して、そのもとで写真撮影といった旅行につ

きもののなんということもない行為が制限されてしまう。

また、「朝鮮鉄道及航路図」は、「道庁所在地」「府庁所在地」「著名都邑所在地」「一二等道路」「同予定線」「国有鉄道」「同予定線」「私設鉄道」「同予定線」「自動車通路」「山峰」「河川」「国界」「道界」「航路標識」「航路」「海底電信線」「蓄積を有する国有要存林」「石炭を含有する地帯」「陸海産物」を図示して、国勢や産業や地勢のあらわれとしての朝鮮半島図となっている。まさに現実世界を転写した図像とみられることだろう。

すでにみた、初三郎の「斬新で愉快ともいうべきデザイン力だからこそ、ひとびとの夢をふくらませ、旅へと誘っていったのだろう」と評される鳥瞰図案内とはちがうこうしたリアルさをあらわしている旅行案内は、あまりひとびとの興をひくことがないためか、なかでも初三郎贔屓が言及することのない旅行手引きである。

こうした図像には、名所や史蹟にとどまらず、「朝鮮婦人の洗濯」（資料 4）や「朝鮮婦女子の板跳」（資料 5。前掲『朝鮮旅行案内記』1929 年には同じ写真がある）をみせる写真にくわえて、鞦韆というぶらんこ乗り（クネティギともよばれる）の儀礼やチマチョゴリの着装などの風俗習慣が絵として描かれてもいる。ここには、名所や史蹟を訪ねられる案内であるとともに、朝鮮の文物や制度や風俗を視察することのできる案内としての「観光」が示されているのである。

すでに瞥見した『朝鮮旅行案内記』（1929 年）や、同様の『朝鮮旅行案内記』（朝鮮総督府鉄道局、1934 年 9 月 30 日。1ーCー250、マイクロフィルム№126）をここでもみよう[30]。1934 年版の『朝鮮旅行案内記』は、「概説編」と「案内編」からなる。後者は鉄道路線ごとの旅行案内であり、前者は「位置地勢」「気候」「行政区劃」「教育」「社会事業」「産業」「歴史」「風習」「年中行事」「動物」「植物」「鉄道」「車窓から見た朝鮮の地形」「駅名漫録」「金剛山案内」「古蹟案内」「行楽地案内」「スキーとキヤムビング」「旅行日程のいろへ」「旅行の注意」にわけられ、総体として「本案内記は、朝鮮を旅行する方々に朝鮮の概念を得て戴くやう各般の事項を掲載」（例言）している。これは行楽案内や路線案内をするなかで、各地の歴史や風習に年中行事までもくわえた膨大な情報を発信する旅行案内となっている（この 1934 年版の案内記にも被写体は異なるがやはり「朝鮮婦人の洗濯」と「板跳」の写真がある）。観光や旅行をめぐる記述において、案内

---

[30] なおこの 2 著は折本体の資料 4 や 5 とちがって冊子体である。前者 2＋275 頁、後者 16＋309 頁。

をする視野をひろげてゆく様相がここにみてとれる。それはたんに案内する朝鮮の面積をひろげてゆくというよりも、観光や旅行がおこなわれてゆくことをとおして、朝鮮とはなにかを報せるときの項目が増えて、より深く朝鮮を視察し観察しているという身構えのあらわれといえよう。

こうした大部の書物に記された旅行案内としての朝鮮の概説や歴史などは、1 葉の両面に印刷されただけの文字数の少ない旅行案内とも呼応している。それを、折本体の『朝鮮案内』（資料 6）と『朝鮮の話』（資料 7）にみよう。「面積地勢」において「朝鮮は、亜細亜大陸の東海岸に架せられたる一大桟橋に譬」えられるといい、かつては「虎臥す野辺と謳はれし朝鮮半島」というように、朝鮮半島というまとまりはアジア大陸の一部としてとらえられている。案内される朝鮮の各地においては、「李朝五百年の王都にして、朝鮮の首都」である京城（「京城市街の一部」という写真あり）、「高麗朝四百七十年の王都にして、一に松都と称し、当時の遺蹟、存するもの多」い開城などが紹介され、朝鮮半島の王朝ごとに歴史をさかのぼることも可能なのだ。記述量は冊子体の案内記より少ないながらも、複数の歴史を報せることでは同じである。

その一方で、朝鮮の面積は「略内地の本州と異ならずして、台湾の六倍強に相当す」ると、日本列島と日本の版図を構成する要素を規矩として計られ、朝鮮半島は「地理の上から見ても朝鮮は一葦帯水」といいうる日本列島との連続としてとらえられる。朝鮮としての歴史のなかにも、「朝鮮は遠い昔から日本とは最も密接な関係のあつた、切つても切れない因縁」がみつけられ、ただしその事例にあげられたのは、「子供達でもよく知つてゐる有名な話」としての「神功皇后の三韓征伐」「太閤秀吉の朝鮮征伐」という「征伐」の歴史だった。そうした過去からの連なりのなかにも「文化の光り日に洽ねく、交通、通信の機関次第に整備し」ていった劃期として「併合以来」という断絶が設けられるのである。ここにみられる文章は、『朝鮮大図絵』（資料 1）の記述のほぼくりかえしとなっている。

折本体の観光案内である『朝鮮の話』は、朝鮮の、いや併合された韓国の現在につらなる過去として歴史を提示している。すなわち、「帝国に併合された」朝鮮は、「今では日本の国の一部」であり、「朝鮮の人はとりもなをさず吾々日本の同胞」にほかならない。「併合」に到る「筋道」がたどられるとき、そのはじまりとして「任那或は、新羅、高麗、百済などいろへの時代」がみつけられ、はるかな過去においても、「何れも我国と親密に交際し、或は我皇室に貢物を献じたといふやうなこと」が「史実」としてみせられる。さきにみた「征伐」の歴史や、ここにいう従属あるいは下位といった関係性（親密な交際といいながら、それは献上なのだから）が過去においても確認されるのである。

「李氏の時世」は、「国土は極端に疲弊し、民心は所謂頽廃気分で、……一方宮中及政府の官吏は互に策を弄して陰謀相踵」いだ時代としてしか想起されない。「転変窮りないグラへしたところの韓国政府」というわけだ。そうした朝鮮への清国出兵を認めることができずに日清戦争が起こり、「其後日本は韓国政府に対し、あらゆる好意を以て、いろいろ政治の改革に尽力した」にもかかわらず、こんどは「露国の勢力に籠絡されるやうになり」、ついに日露戦争となる。

戦争勃発という事実をふまえれば、くりかえし記されてしまう「グラへ」という朝鮮の国情は、「日本帝国が不安でたまらない」と洩らしてしまう憂うべき事態の源泉となる。それに照らしてみれば、日本は「忠君愛国、一死以て国を護るといふ大和魂」として確認できる一体性のゆえに日露戦争にも勝利したというのだ。ならば、日本が領導する朝鮮の安定は「東洋永遠の平和」につらなるし、そうしたあるべき未来をいま現実のものとするのに日本はふさわしい盟主と自賛する。そこで「両国の輿論も合致し……両国官民の熱誠なる同意に基いて」、しかも「至極平和のうち」に「日韓併合」が成立した、と 1910 年に到る歴史が説かれたのだった。

このような「朝鮮の話」を開陳するにあたって、資料 7 はすでに冒頭のあたりで、「朝鮮は昔韓国といつてゐた一の独立国であつた」というその過去を明かしてもいた。そのうえで、「日韓併合」という事態にゆきついたのは朝鮮の事情がそうさせたのだ、と因縁をつける。それは、「東洋の平和」を呼号した前引の 1910 年 8 月 29 日公布の条約や同日付の詔書にささえられた口吻なのだ。日清・日露といった両戦争での勝利も日本の偉大な国力を証明するにたる事実としてとりあげられている。そして、「貿易額」が「十倍以上に増加」したことにあらわれた「朝鮮産業の発達」も、「朝鮮人全体の教育程度といふものは非常に進ん」だという「雲泥の差」も、「総ての方面に於て面目を一新」したその劃期としての「併合」を、日本と朝鮮の歴史のなかに刺し挿む歴史意識の因（よすが）につかわれたのだった。

アジアの盟主たりうる日本と朝鮮がひとつになり、すべてにおいて面目一新となったというのならば、その証しとして産業の発達や教育の充実をあげるだけでは不充分ということなのだろう。「新興の気分に満ちてゐるところの朝鮮」は、「内地同様少しの不安もない平静な朝鮮」なのだとその変化が讃えられる。

朝鮮の全域がまったき平安でおおわれていることを明証するために、かつてその平安を脅かした不穏が参照される。すなわち、「不逞鮮人といふ忌わしい声」「内地で聞いてゐた不逞鮮人の噂」である。それは内実をともなわずに、朝鮮人は不平をいだいていて従順ではなく、好き勝手なふるまいをするけしからん集団だ

という噂にすぎない。それがいまとなれば、

内地から朝鮮へ修学旅行に往つた学生団体の総てが、実際の朝鮮を見、一般鮮人の極めて温和な風を見て、……〔その噂が〕大なる誤解であるといふに一致してゐる。

との目撃談として[31] 朝鮮人の温和さが証明されているというのである。想起される「不逞鮮人の噂」とは、つまりは、あらかじめ用意しておいた否定すべきことがらを予定のとおりに否定する、という仕掛けなのだ。その噂は、いわば、朝鮮の現在の平安を示すために用意された『朝鮮の話』という案内に記された過去の罅なのだ。この平安な朝鮮という現実のもとで、観光をするものたちに「内鮮融和の実を挙げ」よ、との呼びかけがおこなわれる。誤解は解けた、といったそのすぐあとで、「言葉をかへて平たく言つてみると」と切り出されたそのあとをみよう。

譬へば一軒の家の内でも、お互が疑ひの眼を以て、始終腹の中を捜り合つて暮しておるといふやうなことでは、到底一家の平和は保たれない、一つの国にしても同じことで、今では朝鮮は日本の国の一部であり、朝鮮人は正に日本人、即ち我が日本といふ一つの国を成しておるところの国民の一部である。その一つの国民同士がお互に疑惑の眼を以てゐては、結局日本の国民としての固い結束が、出来ないといふことになる。

――誤解は解けた、のではなく、誤解は解かなくてはならない、いや、解けたとみなくてはならない、というわけだ。「真の朝鮮といふものを研究」しよう、「若く新興の意気に燃ゆるところの朝鮮の人達を可愛が」ろう、そして「お互の足らない所を補ひ合ひ」「助け合」い「心からとけ合」おう、すると「朝鮮の困るのは即ち日本の患ひであり、朝鮮の発達は即ち日本全体としての幸福であるといふことを考へ」られるようになる、それこそが「内鮮融和」なのだとの呼びかけがここにある。現状ではなく、あるべき状態としての、いやそう呼びかけつづけるという身振りとしての「内鮮融和」である[32]。

---

31) 彦根高等商業学校の教官や生徒が朝鮮半島や中国大陸でなにをみてどのように考えたのかについては、その一端を、「資料紹介　滋賀大学経済経営研究所調査資料室報④」『彦根論叢』第340・341号、2003年3月、で紹介した。

32) 初三郎も京城を描いた鳥瞰図に添えて1929年の朝鮮博覧会を「内鮮融和絶好のチヤンス」と記していた（前掲『絵に添へて一筆集』）。糟谷憲一は「文化政治を代表する標語であった……「内鮮融和」などは、同化政策を新しい装いのもとに推進するための標語であった」と述べ、その「文化政治の特質の一面」を「治安維持力の強化」と「分裂・懐柔政策」にみている（「朝鮮総督府の文化政治」『岩波講座近代日本と植民地』2、岩波書店、1992年）。糟谷が引用した斎藤実朝鮮総督の訓示（1919年9月3日）には「各位は須く聖旨を奉じて、率先躬行、其の範を示さんことを期し、内鮮人をして常に一家の親、同胞の愛を以て相接し、共同輯睦の実を挙げしむべく、殊に朝鮮人をして心身を研磨し、其の文化と民力とを向上して、愈、聖代の徳沢に浴せしめんことを期せしめらるべし」の文言がある。

こうした企画がはっきりとした現実味をおびるのは、それが「国家の為」の投機となったときだ。「内鮮融和」とは、「やがて日本帝国全体としての平和であり、東洋永遠の平和といふ大目的が達せられ、国民の幸福は永く益々増進し得られるものであると思ふ」、と述べてしまう『朝鮮の話』にみられるこうした期待への願掛けは、前引のように「朕東洋の平和を永遠に維持し、帝国の安全を将来に保障する」ためにおこなう韓国の保護国化であり併合である、と告げた詔書の反復である。日本の安寧を第一義とするとき、その日本には埋めなくてはならない淵が「内」と「鮮」とのあいだにあることとなる。その〈あいだ〉を埋めるのは、アジアの盟主としての日本というわけだ。

『朝鮮の話』と題されたこの折本の表紙をみれば、そこには朝鮮服の女性が子を背負っている姿が描かれている。これは朝鮮人の母子であり、口に笑みも浮かべる様子は、その地のひとびとの「極めて温和な風」をあらわしているのだろう。だがその母の顔は鼻と口しかない、半のっぺらぼうだ。かならずしも母を朝鮮人にかぎることはない。「可愛が」られるべき「若く新興の意気に燃ゆるところの朝鮮の人」は子であり、「可愛が」るのが日本人――となれば、この図像は曖昧な顔の母としての日本が、子である朝鮮を愛しみ育むという母子像でもあるのだ。

5 つ折りになっているこの『朝鮮の話』は、裏にあたる面の 3/5 が「朝鮮の旅と名所旧蹟」にあてられている。まず「旅行上の注意」で季節ごとの様子を伝え、はじめての旅行者のためにも通貨や税関検査を教えるのは旅行案内の定番である。つづく「名勝旧蹟」には「海水浴と避暑地」「山と河」「瀑布」「古名刹」「古跡」[33] があげられる。こうした旅行案内のつい右側で明かされていた、「全く多数母国の人が本当の朝鮮なり、朝鮮人といふものを、真に理解してゐない」ゆえに生じたのだという「大なる誤解」。案内される名勝旧蹟がこの「誤解」を解くための「本当の朝鮮」なのか、そこにゆけば「本当の……朝鮮人」に出会うことができるのか。『朝鮮の話』はそれを教えてはいない。

朝鮮は、テントに宿営したりハイキングをおこなったりする場所としても、朝鮮総督府鉄道局によって紹介される。『キャンピング』（資料 8）という折本をみると、「キヤンパーを喜ばす場所は無数にある」という金剛山など「キヤンピングの好適地」の位置、その地への交通の便、そこでのみるべき眺望が紹介される。たとえば、おすすめ場所のひとつとして「元山松濤園海浜」が、「海水浴の男女は去つて波濤の響だけが浜に

---

[33] ここで「新羅朝一千年の都城である」慶州や「百済の旧都」扶余が紹介されるのは観光案内の定番である。

満ちてゐる。俺達のテントからは静かに夕餉の烟が立揚る」とはじまる文章と、「元山松濤園キヤンピング」と題された写真によって「スケツチ」されるというぐあいだ。

そもそも、なぜキャンピングなのか。ここでは、人工＝現在性＝都市／自然＝原始的＝キャンプ地、という対照がなされたうえで、「人口の都市集中は世界各国の現勢であつて、不自然的な生活が次第に人間を蝕つて来てゐる」ので、「文化の過重にくるしんで居る神経衰弱性の現代人」にこそ、「原始的生活に帰るキヤンピング」がすすめられるのである。そこでキャンプ生活をするための「条件」が示される。第 1 には、「自宅より充分に離れて居ることで、日常の複雑な生活から逃れ」られる場所、第 2 に、「アトラクシヨンのあることで、風景がよいとか、伝説口碑又は歴史的の趣味、地理、電気、動植鉱物学的の興味、又は高山、深林、渓谷、河海、湖沼等の冒険遊戯の対象となるもの」がある場所、となる。「白砂連る十数丁の海浜で海水浴と釣魚の楽しみがある」「神仙台」、「キヤンプには好適の幽邃なる仙境」としての「鶏龍山」、「由緒古き古刹附近には瀑布」のある「逍遥山」など、朝鮮半島は第 2 の条件をそなえたキャンプ地に事欠かないというわけだし、「内地」からでかければなおのこと、そこは第 1 の条件をかなえるにうってつけの地となろう。

では、この「文化の過重にくるしんで居る神経衰弱性の現代人」とはだれなのだろうか。このキャンピングの手引きには、「不逞鮮人」をめぐる噂も、「日韓併合」を劃期とする歴史認識も書きこまれていない。これは、おおくの観光案内にもりこまれている歴史や産業の現勢といった諸情報を排除して、キャンプをおこなうために必要な知識を示した便覧となっている。キャンピングに便利なこの折本を読むとき、ひとは一瞬、「日常の複雑な生活から逃れ」るために、「冒険遊戯の対象となるもの」がある場所へでかけてゆくものとなれる気にさせられる。さきに示したこの便覧折本を規定する対照項の、前者を「内」、後者を「鮮」とするならば、キャンパーは両者のあいだをゆききするいわば越境者となる。

では、「鮮」とまとめられた朝鮮半島はどこも同じく均質なのだろうか。「日韓併合」により「文化の光り日に洽ね」く照らされた「鮮」であるにもかかわらず、いやそうであればこそ、その内部には、文明化のすすんだ都市がみつけられるのである――「併合以来市区改正家屋の改築、年一年に旧時の面目を改めて大廈高楼櫛比の盛観を備へ、市内の交通より市民の日常生活に至るまで文明の設備一としてなきはなく、内地大都会を凌ぐの概あり」（『朝鮮案内』資料 6）といわれるまでの京城を代表とする都市が賛美される。そしてその対極にあるのが「原始的生活」をおくりうる「キヤンピングの好適地」だ。キャンプ地の「選定上の注意」として、その第 5 に「人家、道路より相当離れたる所」があがっていた。なるほどできるだけ文明の証

しとしての施設から隔絶した場所でなくては、ひとは「原始的生活」に帰ることができない。さきに示した、人工＝現在性＝都市／自然＝原始的＝キャンプ地という対照項は、幾級もの階梯となって「鮮」内にもあるということだ。ならばキャンパーは、「内」と「鮮」のあいだの境界も、さらに「鮮」内の諸階梯のあいだをもめぐる越境者なのだ。キャンパーの身のこなしは、冒険や遊戯という一見すると非政治性の濃厚な領域において、いくつもの〈あいだ〉を越えて「融和」をつくる身振りだとしよう。

キャンパーはどれだけ好適地であろうとも、そのキャンプ地に住みつづけることはない。彼も彼女も、「文化の光り」が照らされはじめたという「日韓併合」のその後という歴史のなかで、「内」←――「鮮」（「京城」←「キヤンピングの好適地」）の階梯を、つねに左へ（垂直軸ならば上へ）移動することを指向する。「キヤンピングの好適地」は「原始的生活」に帰れる場所でなくてはならないがゆえに、そこはいつまでも「文化の光り」がとどくことのないとり残された未開地となる。

「キヤンピング程身心に安慰を与ふるものは少ない」とすすめる[34] この折本はまた、キャンピングをおこなうことで「『随所為主』の禅味を味ふことが出来る」とひとびとを誘う。どのようなところであっても（といってもキャンピングにふさわしい場所を「選定上の注意」にしたがって探す必要があるのだが）、環境や境涯のままにうごかされることなく独立自主でいられる――この心境の確保こそがキャンプ生活を醍醐の味にするというのだ。1910 年以後の朝鮮半島においては、この心身の慰安も自主独立という気概も、残余としての安息地から醸成されることとなる。「文化の光り」のもとでキャンパーが越境をくりかえすとき、キャンピングする彼や彼女がこの残余をつくりだすといってもよい。

この『キャンピング』という折本は、日本語で書かれているのだから、日本語が読める日本人にキャンピングをすすめている。日本人にとってみれば、「アジアの盟主」であることを朝鮮半島において確認することと「随所禅味」を味わうことは相同じいといえようし、また植民地化という暴力の行使者として鬱屈を感じたとしてもその心身の慰安を朝鮮半島でのキャンピングにもとめたともいえよう。他方で、「随所為主」とは 1920 年代末の朝鮮人という集団にとっては、もはや望みがたい願いとなっていた。その朝鮮半島に住む日本人としての朝鮮人にとっても、観光やキャンピングという冒険であり遊戯である快楽への筋道がいくらかで

---

[34] 前掲『朝鮮旅行案内記』（1934 年）でもその「キヤンピング」の項で「文化の過重に苦しむ今日の都会生活者にとつては、かゝる原始生活に帰るキヤンピング程身心に安慰を与ふるものは少ない」とくりかえされているが、そこでは「神経衰弱」と「随所為主」の語が削除されている。語意の調子をやわらげたともいえようし、もはや「神経衰弱」は癒され「随所為主」は不要となったのかもしれない。

も開かれているとするならば――、その細く曲がりくねった隘路をとおって彼らや彼女たちが「キャンピングの好適地」にたどりつけたのならば――、キャンパーとしての朝鮮人も朝鮮半島の一隅においては心身の慰安や自主独立の気概を感じられたのかもしれない。

観光が大衆化してゆくとき、融和すべき「内鮮」の一方である朝鮮半島も日本人にとっての旅先となってゆく。観光の対象として朝鮮が案内されるとき、そこが文化の光に照らさるそのはじまりとして 1910 年が劃された。植民地をもつ日本人にとっても、日本人となった朝鮮人にとっても、慰安と自主の源泉として、かつ融和を実現する仕法として、観光という心身の行使があったのである。1910 年の出来事である「併合」とは、その内実が韓国を日本に併呑させてひとつにするとの謂だったように、「内鮮」をめぐる「融和」も、日本人と朝鮮人が融けてまじりあって仲睦まじくひとつになるというのではなく、朝鮮人を日本人に融け込ませようとする暴力にほかならなかった。「内鮮」という区別は、つねに前者が優位に後者が劣位におかれることによってなりたっている。併合をめぐる「日韓」にしても、融和にかかわる「内鮮」においても、合一の情勢が指し示されながら、あるいは合一が呼びかけられるときはなおさらのこと、両者のあいだには眼にみえる分断がかならずある。その境界を越えようとする試みが観光であり、その越境が可能となっても不可能なときであっても、その事態をめぐる「心理学的用語でいうところのコンペンセーション」 [35] もまた観光のたまものなのだった。心身の不安や自主独立からの阻害をめぐる代償としての観光が植民地朝鮮に展開するとき、癒されるべき日本人が観光するにふさわしい朝鮮像がえがかれてゆく。歴史も風俗も地勢も朝鮮に固有のそれらしく参照され指示されはするものの、あくまでそれらは日本人が認識することによってはじめてなりたつ朝鮮史や朝鮮風俗なのだ。

おわりにかえて

ここでおもにとりあげた資料は、そのほとんどが 1929 年前後に発行された旅行や観光をめぐる案内記だった。この時期に複数の（ただし記述は似ている）観光案内が発行されたことの理由は、ひとつには、朝鮮

---

[35] 安丸良夫「近代天皇制の精神史的位相」歴史学研究会編『天皇と天皇制を考える』青木書店、1986 年。

での博覧会の開催によるのかもしれない。とするとまさに、「内鮮融和」の絶好の機会として観光が活用されたといえよう。少なくとも彦根高等商業学校収集資料においてみるかぎり、1930 年代後半から 1940 年代にかけての観光案内記は所蔵されていない。この小稿でみた 1920 年代の観光をめぐる意味のその後をみるときには、べつな領域を模索する必要があるだろう[36]。この小稿は、観光をめぐるテキストにあらわれたナショナリティや歴史意識をめぐるおもしろい記述をとりだし、かんたんな考察をくわえるデッサンとした。朝鮮総督府鉄道局や南満洲鉄道株式会社京城鉄道局や各地の商業会議所が作製した、平壌、京城、大邱、釜山などについての案内記を、ここで読むことができなかった[37]。また、観光という接触面が設けられることにより、「日本」と「朝鮮」のあいだでどのような交渉やせめぎあいが展開したのかについても、充分な考察をおこなえなかった。小稿の最初の動機は、初三郎の鳥瞰図があらわす鮮やかさであり、その図像との対話を試みようとの願望にほかならなかった。（2003.5.15）

---

[36] 研究所では、『新興の朝鮮』朝鮮総督府、1929 年、1―C―77、『外国人の観たる最近の朝鮮』調査資料第三十五輯、朝鮮総督府、1932 年、1―C―166、『我国は朝鮮で何を為したか』朝鮮総督府、1932 年、1―C―175、『最近の朝鮮』朝鮮総督府、1932 年、1―C―213、マイクロフィルム№.123、『朝鮮最近の面影』全国師範学校長会同席上に於ける宇垣総督の講演要旨（昭和八年九月二十九日於京城師範学校）、1―C―235、『最近の朝鮮』朝鮮総督府、1934 年、1―C―213、マイクロフィルム№.123、『朝鮮史のしるべ』朝鮮総督府、1937 年、1―C―408、朝鮮商工会議所・京城商工会議所会頭賀田直治『新東亜建設と朝鮮』（昭和十四年二月十一日稿）、1―C ン―463、朝鮮総督府情報課長倉島至編『前進する朝鮮』朝鮮総督府情報課長倉島至、1942 年、1―C―443、朝鮮総督府情報課編『新らしき朝鮮』朝鮮行政学会、1944 年、1―C―461、マイクロフィルム№.129、などを所蔵している。

[37] 研究所ではたとえば平壌については、広瀬憲二『歴史の平壌』平安南道庁内平安南道教育会、1924 年、1―C―130、八田実『伝説の平壌』平壌名勝旧蹟保存会、1937 年、1―C―383、といった文献も所蔵している。後者の受入印は「１３，１，３１」とあり、裏表紙には「朝鮮平壌牡丹台遊覧記念」スタンプが押印されている（日付は「１２，７，２９」）。この文献は朝鮮で購入したのちに調査課で受け入れたのかもしれない。また地域といったときに朝鮮と満州をひとまとめにする観点もある（南満洲鉄道株式会社東京支社運輸課編『鮮満支旅行の栞』1928 年 3 月調、1―F―1457、『朝鮮満洲旅行案内』鮮満案内所、1932 年、1―C―214、マイクロフィルム№.134、などを参照。前者では鮮満案内所の業務を「鮮満案内所は朝鮮総督府鉄道局と満鉄会社と聯合で設置されたもので朝鮮、満洲、支那に関する各種の質疑応答、旅行、通関、貨物に関する説明、出張講演、聯絡切符の発売等を取扱つて居ります」と説明している。前掲『キャンピング』にも「鮮満案内所は専ら朝鮮及満洲のことを広く世に紹介せむが為、旅行の案内は勿論、企業、取引の紹介其他鮮満のことなら何でも総て無手数料で御相談に応じてゐる」との宣伝があった）。